

自国の歴史とどう向き合うか (続) ——1945年夏の記憶¹⁾ —— Japanese Recognition of History Re-Examined : Defeat and Memory of Summer in 1945

浅野 明
ASANO, Akira

はじめに

かつて、歴史家の増田四郎氏は、「われわれ日本人は、一見非常に歴史をこのむ国民であるかのようにみえるし、外国人からもまた、一般にそのように考えられているようである」が、「単に個人的なつながりやアフェクションで由緒ありげなものを尊ぶとか、ただ漠然と超歴史的な共感のゆえに古い物語が好きであるとか、伝統的な情緒のヴェールの中にとけ込む雰囲気ゆえに古いことが楽しいとか、家系が古いゆえに尊いといったことからは、いずれも真に歴史的な反省とは異った心情なのであって、そのような意味でいくら古いものを尊重しても、それは決して歴史をこのむ国民とはいえないのである」とのべ、日本人については、「一口にいえば、われわれは知識だけが過剰であるが、日本という国、自分の住む地域等の地理と歴史に足をふまえて、じっくりと自分の生活の基礎を反省し省察してみようとする努力をおこたってきたのではないかと思われる」と評価した。氏はその理由のひとつを、「おそらく人口過剰と生活の苦しさ、その不安定、ゆきあたりばつたりの考え、国家本位の立身出世主義等の社会経済的な原因にあるであろう」としつつ、しかしヨーロッパの人びとは、「現に未曾有の苦し

さと不安定の中で、各々自国の進路を真剣にさぐっているのでは」あり、「しかもその活路の一つは、歴史を越えた人類全体の平和を祈念しつつ、その理念を仰いで各々どのように歴史を活かしようかの精神緊張の持続にもとめられているように思われる」とし、「なぜこんなにも考え方がちがうのであろうか」と問題提起する。この問いに対し氏は、「その最大の理由の一つを、歴史的な考え方の上手、下手、または強弱にもとめようと考えたい」という回答を示したのである²⁾。日本の西洋史家としては異例に大胆なこの発言は1959年のものであるが、私見によれば、いまなお正当性を失っていない。本稿の目的は、増田氏によって指摘された日本人の歴史認識にみられるある種の「欠陥」の内容と意味について、筆者なりの考察を試みることである。では、なにが検討の素材とされるべきであろうか。

この問題を考える場合のひとつの有効な方法は、国家的・国民的な記念日の扱われ方に焦点を当てて検討してみることであろう。その理由は、どこの国でも、記念日の祝賀をとおして、当該国民のアイデンティティが、したがってまた歴史認識の一端が、外に向かってもっとも鮮やかに示されるからである³⁾。また、現代においては、こうして表明される

国民のアイデンティティそのものが再検討の対象となっていることにも注意したい。冷戦の終結以来、既存の秩序の再検討が世界的な規模で進行しつつあるが、いまや国民国家が、その最終的な標的として浮上しつつある。「国家の枠組を離れる（こえる）」というたぐいの言葉が、社会のさまざまな分野で広く使われるようになってきていることもそのあかしである。しかし、いうまでもないことであるが、既存の国家制度や社会秩序を単純に否定してみせたところで、それによって脱国民国家的生き方が実現できるわけではまったくない。国家を相対化しようと思うなら、まずその国家と国民についてじっくりと考察することが不可欠である。国家を離れるためにこそ、多様な角度から具体的な国家論を展開しなければならないし、国民統合のあり方とその特徴について深く考えてみなければならない。なぜなら、それぞれの国民にはみな異なった歴史があり、国家や国民を一般論で論じることの限界は明らかだからである。日本人の歴史認識の一端を明らかにしようという本稿は、国家的・国民的記念日についての考察をとおして、日本の国民統合のあり方、アイデンティティの再検討にも道をひらくものである。ところで、数ある記念日のうちでも、国家的な大事、すなわち戦争に関する記念日が、国民統合にとってもっとも重要な日となるのは自然の理である。そこで、まずここから本稿を説きおこしていくことにしよう。

昭和という時代は、1926年12月25日にはじまり、1989年1月7日まで、足掛け64年間続いた。この時代を回顧するために公刊された記録や論考は膨大な数にのぼるにちがいないが、著名人ではない庶民の証言を集めたもの

としてたまたま手にした1冊をひもといてみると、二つの特徴的な事実に気がつく。まず、直接間接に戦争に関連した作品が全体のおよそ4分の3を占めているという事実である⁴⁾。戦争は15年間にわたって続いたから、もちろん短いとはいえない。しかし、いずれにせよそれは1945年には終わっており、昭和という時代はそれからさらに40年以上続いているのである。にもかかわらず、昭和に関する証言がこのように戦争の時代に偏在しているのをみると、日本人にとって15年間の戦争が持っている特別の重みを感じると同時に、戦後の43年あまりは、あたかも戦争の時代に付属した、付け足しの時代のようにすら感じられてくる。そして、この「付け足し」という感覚は、戦争をすではるか過去のこととして生きている多くの国民にとっても、やはり意味のあることのように思われるのである。なぜなら、われわれはいまなお、あの戦争の「負の遺産」を背負って生きていると考えるからである。

庶民の証言にみられる特徴の二つ目は、戦争に関連した証言の多くが、その終結に関連しているのに対して、戦争の開始、たとえば1931年9月18日（柳条湖事件）や1941年12月8日（真珠湾攻撃）に関連させて自らの体験を回想したものがほとんどないという事実である。これは、現代の日本人にとって戦争がどういう意味を持っているのか、という問題を考える際に、重要な示唆を与えてくれる。もちろんこれには、8月15日のイベントにはことのほか熱心な日本のマスメディアが、こと「戦争開始の記念日」ということになる、極めて冷淡であるということが強く影響しているように思われるが、しかしそのよう

なマスメディアの姿勢も、国民の意識を反映したものにはすぎないという評価もできよう。いずれにせよ、これらの特徴から推測できるのは、戦争にいまなおこだわりを持っている日本人は少なくないけれども、その関心は戦争の終結という局面に集中しており、開戦と関連する諸問題にはおおむね無関心であるらしいこと、そしてその事実、日本人の歴史認識の問題点が潜んでいるのではないか、ということである。

戦争の歴史に対する日本人の関心がこのようにいびつであるということについては、少なくともひとつの理由を想定することができる。それは、戦争の記憶のされ方がいびつであったから、という理由である。同じ戦争であっても、外地と内地とでは、その現れ方もそもそもまったくちがっている。歴史としての戦争の叙述は、外国との戦いが始まったときに始まり、停戦・休戦の成立とともに終わるから、当然、外地の出来事に沿って叙述される。しかし、内地の戦争は、それとはまったく異なる歴史をもっている。そして、国民の多くが実際に体験するのは、こちらの戦争のほうである。内地の戦争は、端的に言って、空襲とともに始まり、それがなくなったときに終わる。この点は、作家の吉村昭氏が、「東京での戦争は、開戦から五カ月後の昭和十七年四月十八日の東京初空襲からはじまった、と言っていい」と語っているとおりである⁵⁾。そしてこのような認識を前提にすれば、8月15日に戦争が終わったという理解は、内地での実体験に基づくかぎりおおむね事実であったといえるのであり、これが、戦争の公式の終結である9月2日、そしてそれと一体のものである戦争の開始となる日付に、日本人の

多くが関心を持ちえない理由を生んだといえよう。だが、いうまでもないことであるが、内地において体験された戦争は、戦争の持つひとつの局面にすぎないから、もっぱらこの体験に依拠した戦争認識が、歴史としての客観的な戦争の認識としてはきわめて不十分なものととどまることは避けられない。一方、外地での戦争については、多くのことが語られてきたようにみえるが、その多くは個々の従軍兵士の思い出の域を出るものではなく、戦争の本質に関わるもっとも肝心なことは、実はほとんど語られてこなかったというのが真実であろう⁶⁾。このように、二種類の戦争体験の併存と、それぞれの体験の語り方が不完全であったということによって生み出されたいびつさが、その後の日本人の戦争認識に否応なく影を落とすと考えられるのである。

日本人の歴史認識の弱さという問題提起に注目し、そこから戦争の問題に目を向けてきたわれわれは、こうして問題の核心に入ることになる。とはいえ、これらの諸問題を本稿ですべて検討することはとうていできない。ここでは、先行研究を手がかりにして、敗戦後の日本国民の歴史認識の一端を検討するとともに、戦争体験者たちの当時の証言にまでさかのぼって、敗戦時の日本人の心のありようを探ってみたい。このような考察をおこなうのは、いうまでもなく、単なる回顧趣味からではなく、その作業をとおして、日本人の歴史認識の問題点、ひいては日本の国民としてのわれわれの今後の生きかたについて思いをめぐらしてみたいからである。

註

1) 本稿は、『山形大学歴史・地理・人類学

- 論集』第5号(2004年)の紙面を汚した拙稿「自国の歴史とどう向き合うか—現代ロシア社会の一段面—」の続編である。検討の対象は異なるが、前稿と同様に、戦争の記憶と歴史認識の問題を追究している。
- 2) 増田四郎『歴史学入門』(河出書房新社、1959年) 8-12頁。なお、この叙述は、同氏の著作『歴史学概論』(講談社、1994年)に、表現が若干変更されたものの、ほぼそのままのかたちで再録されている。
 - 3) この種の記念日についての研究は、アナル派のそれをはじめとして少ないが、ここでは文化的記念日の持つ現代的な意味を解明しようとした、ウィリアム・M・ジョンストン/小池和子訳『記念祭/記念日カルト——今日のヨーロッパ、アメリカにみる——』(現代書館、1993年)のみをあげておきたい。
 - 4) 小学館文庫編集部編『わが子に、孫に伝えたい——昭和体験』<上><下>(小学館、2002年。原本は1989年刊。以下、小学館『昭和体験』と略記)。ここに収められた72篇の回想のうち、多少なりとも戦争に関連しているものが、およそ56篇を占めている。
 - 5) 吉村昭『東京の戦争』(筑摩書房、2005年、初版は2001年刊) 9頁。また、次のような心情も無視できない。「私の戦争の終わりは、戦災の丸焼けです。戦争のショックより、戦災のショックが大きかったです。戦災が、私にとっては敗戦なんだろうと思います」。CRT栃木放送編『戦後50年・あの時私は……60人の玉音放送』(随想舎、1995年、以下CRT『戦後50年』と略記。) 93頁。「敗戦後、空襲こそありませんでしたが、私たち家族のどん底生活はしばらく続き、二年後、父は急性肺炎で他界しました。五十五歳でした。戦場へ赴くことはありませんでしたが、銃後で空襲と対決し、飢餓と戦い抜いて果てた父は、まさしく戦死であると私は思っています」。CRT『戦後50年』121頁。
 - 6) 南京大虐殺や七三一部隊などは、おそらく氷山の一角にすぎない。最近、その一角がまた明らかにされた。高尾翠『天皇の軍隊と平頂山事件』(新日本出版社、2005年)。

I. 敗戦と日本

敗戦後の日本社会を、「ねじれ」のなかに生きること、あるいはその「ねじれ」の中にある「汚れ」を自覚して生きることを運命づけられながら、それを回避し、ひたすら自己欺瞞のなかで生きてきたととらえたのは、加藤典洋氏であった¹⁾ 本稿の筆者は、この加藤氏の論点が、戦後日本社会論の出発点におかれるべきであると考えている。では「ねじれ」とはなにか。氏の主張はすでによく知られているところであるが、念のために確認しておく、それは次のような状況をさす。たとえば、日本国民は「平和憲法」をもっているが、それはわれわれ自身の手でつくられたものではなく、連合軍総司令部の発意によってつくられ、占領下の非独立国である戦後日本の国民、政府に押しつけられたのであり、それはまた、さしたる抵抗もなく受け取られた。加藤氏が戦後の原点にあると考える「ねじれ」の一つは、「この憲法の手にされ方と、その内容の間の矛盾、自家撞着からくる」。われわれは、その矛盾や「ねじれ」の中にある「汚れ」を直視し自覚することがなく、一方でわれわれは、ここに掲げられた価値観を否定することもなく、自らのものとして自力で保持してきた。しかし、「押しつけられた」という事実を直視していない以上、この憲法に対する態度は、「わたし達は、この憲法を実質的には自分で欲したのだと考えるか、最初からこの憲法を欲していないし、いまも欲していないのだと考えるしかなくなる。わたし達は自分をいつわるしかなくなる」のである。われわれは、戦後を、このような自己欺瞞のなかで生きてきた。この矛盾を解決しようとするれば、その方法はひとつしかない。つまり、「強制されたものを、い

ま、自発的に、もう一度、『選び直す』という」ことである。だが、加藤氏によれば、このような主張はまったく現われなかった。なぜなら、憲法をめぐる議論は、それを擁護する側も、否定する側も、ともに現実回避の論法に終始したからである。前者の側は、たとえば、「押しつけられた」けれども「民主的改革を望んでいた日本人民には熱烈に支持された、という実質的憲法『かちとり』説」、あるいは、平和条項は戦争による死者からの贈り物だとする「憲法形見説」、あるいはまた、初発において押しつけられたのは事実だが、国民が実質的にそれを長く保持することで「汚れ」は消えている、という「押しつけ消化説」などであった。他方、後者の側から現われたのは、「自主憲法を制定せよ」という主張であって、これも、「自らが戦後新憲法の恩恵を受けていることを直視しない現実回避の論法だった」。護憲論も改憲論も、ともに原点における「ねじれ」を受けとめることを回避し、「そういう主張を行うにはすでに自分が汚れているという自覚をもたない点で共通しているのであり」、両者は「対立者であるというより、むしろ、双生児的存在なのである」²⁾。敗戦は、負けた国にそれ以前とは違う時間をもたらし、その結果、敗戦国は「いわばぎくしゃくした、ねじれた生き方を強られる」のであるが、「その『ねじれ』が日本では、『ねじれ』としてすら受けとめられていない」のである。氏のこのような主張の基礎に横たわるのは、われわれ日本国民が「口悪くいえば低能、言葉を改めれば、なにかを激しく欠落させた国民」だという厳しい認識である³⁾。問題にされているのは、ここでも、戦後の日本人のある種の欠陥である。

1995年に公刊された加藤氏の論考が、文芸評論の立場から、戦後日本社会の基底に横たわる自己欺瞞をついたとすれば、それから10年後の2005年に現われた佐藤卓己氏の著作『八月十五日の神話——終戦記念日のメディア学——』（筑摩書房、2005年）は、メディア学の立場から、加藤氏の指摘を事実をもって裏づけるとともに、そこからの脱出口のひとつを具体的に提示したものと評価できよう。本稿にも関連するところが多いので、ここで佐藤氏の著作をややくわしくあとづけておこう。

本書の構成は以下のようになっている。

序章 メディアが創った「終戦」の記憶

第1章 降伏記念日から終戦記念日へ——「断絶」を演出する新聞報道

第2章 玉音放送の古層——戦前と戦後をつなぐお盆ラジオ

第3章 自明な記憶から曖昧な歴史へ——歴史教科書のメディア学

まず序章では、1945年8月15日のいわゆる「玉音放送」について、その形式と受け手（聴取者）について検討される。受け手の検討においては、「玉音拝聴の写真」の代表的なもので、1955年8月15日の『朝日新聞』に掲載された「終戦の放送に泣き崩れる女子挺身隊員（九州飛行機香椎工場で）」とキャプションの打たれた写真が、意図的に創作されたものであったこと、それが、「撮影者の意図がどうあれ、戦後に向けた『戦意高揚』のプロパガンダ写真として利用された」こと、つまり「高度国防体制から高度経済成長へと進んだ心性とメディアの連続性の上に位置づけられるべきである」ことが明らかにされる。しかも出

所のはっきりしないこれらの写真が国民に広く受け入れられたのとは対照的に、9月2日の降伏文書調印という事実は、それを撮影した多くの写真とともに黙殺され、もっぱら8月15日で戦争が終結したという「物語」が語られてきたこと、そして、ひとたび物語がつくられると、その「物語＝集団的な記憶」に拘束され、今度は個人の記憶までも、「メディアによって整理され再編された『記憶＝歴史』の上」に位置づけられる結果になることが、具体例とともに語られている⁴⁾。

続く第1章では、多くの日本人にとって、いわば自明のことと思われている8・15＝終戦という事実が、実は1951年、つまり講和条約の調印と占領の終結のころから、まず新聞ついでラジオがはじめた8・15イベントに端を発していること、この年を境に、「8・15終戦記念日」が台頭するとともに、『9・2降伏記念日』の記事は忽然と姿を消し、『講和』とともに『降伏』の記憶は新聞紙面から消え去ったことが明らかにされる⁵⁾。のみならず、原爆の記憶としての「8・6」もまた、この時期に、つまり占領の終結と時期を同じくして確立してくるという。そして、これら一連の動きが完成するのが戦争終結10周年にあたる1955年の、ラジオも加わったマスメディアによる大々的な「終戦特集」であり、「8・15終戦≠降伏」記念日の創作は、結果として「9・2降伏」の事実を最終的に忘却させるものとなった。こうして、1955年を境として、著者によれば、「戦争の記憶」の重心は「反省」から「平和」へと移動したのであり、それは「敗戦＝占領」の記憶を「終戦＝平和」に置き換えようとする心性において進められたのである。著者は、これを「国

民的記憶の55年体制」とよぶ⁶⁾。

第2章では、前章で明らかにされた「8・15終戦」の記憶が確立していく過程が検討される。まず、「玉音放送」がどのように聴かれたかの具体例が示され、次いでそれらの個別的な記憶が、典型的な「語り」へと収斂されていく過程が解明される。その結論として、「玉音放送」は降伏を告知するだけでなく、降伏を決定する儀式に国民を参加させるという意味があり、その儀式において天皇が行使したのは、古来から続いた祭祀王としての祭祀大権であったという理解が示される。著者によると、「玉音」の放送日として8月15日が選ばれたのも、決して偶然ではなく、戦時中に意識的に展開された「戦没英霊盂蘭盆会法要」中継の延長線上でとらえられねばならないのである。占領中は「戦没者慰霊」の法要放送は表面的には自粛され、「新しい日本」を印象づける試みがなされているが、実質的には従来の形式が踏襲されており、「国家目標の“内容”は変化してもそれを包む国民心性の“形式”は不変であった」とされる⁷⁾。

8・15の記憶が、マスメディアによって編成され変容していく具体的な過程が明らかにされたのを受けて、第3章では、こうしてつくられた「記憶」が、どのように歴史化されていくのかという問題が、歴史教科書を素材として検討される。それによると、現行の小学校と中学校の歴史教科書では、そのすべてが8月15日を終戦の日としているのに対して、高等学校のそれでは9月2日をもって終戦とするものが圧倒的で、一貫性に欠けたものとなっている。8・15を終戦の日とするのは、「8・15革命」の神話を掲げる進歩派の論理と、「9・2降伏」以降の現実を否認したい保守派

の心理が、「8・15終戦」の利害において一致したからである。また、「玉音放送」の記述が教科書に登場するのは、1954-55年からであり、これもまた「記憶の55年体制」と連動していることがわかる。それまでは、戦争の終結についても、現実の体験に合わせて種々の記述がなされていたのであるが、これ以後は「8・15終戦」の記述がしだいに優性になっていき、占領期の影響をとどめる「9・2降伏」の記述をとる教科書は、「8・15戦没者慰霊式典」が制度化された1963年までには、その多くが姿を消したという。のみならず、中国でも、日本の8月ジャーナリズムに合わせて、抗日戦勝記念日を従来の9月3日から8月15日に前倒しするようになってきており、日本の「終戦記念日」と同日に韓国と中国でおこなわれる抗日戦勝記念の祝賀が、結果的に日本国民の否定的統合の機能を果たしているという。これについて著者は、「旧『大東亜共栄圏』諸国が日本標準の8月15日を採用することは、歴史の共有と考えることもできようか」と、皮肉な調子で評している⁸⁾。とはいえ、日本国内には、やはり大きな分裂が存在する。それは歴史教科書にも反映しており、前述したように、小学校・中学校の教科書と高等学校のそれとが不整合をきたしているだけでなく、同じ出版社の発行する高等学校教科書においても、日本史と世界史とでは異なった基準が採用されているという事実がある。

このように論を進めてきた著者は、最後に、戦争について冷静に検討するために、8月15日に公式に与えられている二つの意義、つまり「戦没者を追悼し平和を祈念する」という意義を二つに分け、戦没者追悼の日を8月

15日に、「平和を祈念する日」を9月2日に当てるべきことを提言している⁹⁾。

メディア学の立場からの佐藤氏の著書は、記念日としての8月15日を主たる素材にとりながら、戦後日本の社会を論ずる際のわれわれの思考の枠組に対して根本的な転換を迫るものである。とくに、敗戦ではなく終戦の記憶が、戦争終結後10年たった時点でマスメディアによって意図的につくりだされたという指摘は、われわれに、戦争についての記憶のみならず、戦後日本社会論全体の再検討を迫るものであり、前述の加藤氏の議論とも共鳴するところがある¹⁰⁾。とはいえ、本書で提示されているのは検討のための新たな枠組であって、そこに盛られるべき具体的な内容については、今後の各研究者の問題意識に委ねられている。

また、歴史学の立場からすると、本書には、見過ごすことのできない点がもうひとつある。体験者の記憶と歴史叙述との不整合性という問題については、内地と外地の戦争体験の相違と、そのそれぞれに内在する記憶と歴史叙述の不整合を例にとりてすでに説明しておいたが、その不整合は、ある事実や事件の実際の体験者が、それらについて叙述された歴史に対してある種の違和感や不満を抱くことで、しばしば顕在化する。佐藤氏の著書は、体験者のこのような違和感や不満がどのような過程を経て現われてくるのかという問題に、改めて検証を加えたものとして、歴史学の立場からも学ぶべき点が多いのである。もちろん、体験者がこのような違和感や不満を抱くからといって、それによって歴史叙述の価値が直ちに失われるわけではない。なぜなら、実際の体験からその歴史的な認識へと人びとの意

識が進んでいくこと自体、避けて通ることのできない過程であるというだけではなく、その過程を経ることで、過去が記録されるとともに、体験者には見えていなかった諸事実や諸関係が明るみに出される可能性を持つからである¹¹⁾。しかし、それはやはり可能性であるにすぎず、それが実現されるためには、人びとに「歴史的なものの考え方」が必要で、それはまた、厳しい学問的な鍛錬と精神的な緊張の持続を要求するのである。そしてこの「歴史的なものの考え方」こそ、増田氏が、「われわれ日本人にはかなりむずかしい考え方、すくなくとも従来馴らされていない考え方である」と指摘したものであった¹²⁾。

さて、先行する諸研究についてのこれまでの検討を踏まえて、われわれは本稿の課題を果たすための考察方法と立脚点を、次のように設定することができる。それは、歴史的な事件の実際の体験にまでさかのぼり、そこから歴史叙述が生まれてくる過程を追体験するかたちで考察することにより、その問題点を浮き彫りにするという方法である。具体的には、1945年（昭和20年）の敗戦前後の時期にたちかえり、当時の人びとの書き残した日記その他を素材にして、敗戦前後に生きた人びとの心のありようを再検討し、それをとおして戦後の日本人の歴史認識の形成過程を跡づけてみたい。

註

- 1) 加藤典洋「敗戦後論」、同『敗戦後論』（講談社、1997年、あるいは筑摩書房、2005年）所収。この論考の初出は、『群像』1995年1月号である。なお、本稿での引用はすべて講談社版による。
- 2) 加藤、前掲書、18-24頁。

3) 同書、9、13頁。加藤氏は、湾岸戦争（1991年）に際して「文学者」が出した反戦署名声明を自己欺瞞の実例としてあげつつ、「ここにあるのは個々人の内部における歴史感覚の不在」であり、「本来はない歴史主体の、外に向けての捏造が生み出されている」とする。加藤、前掲書、14-18頁。先に引用した増田氏の発言とは文脈を異にするが、それでも、両者が等しく、戦後日本社会の根底に歴史的感覚の欠如をみているという点に注目したい。

ところで、加藤氏の議論に対しては、周知のように、高橋哲哉氏の批判がある。高橋哲哉「日本のネオナショナリズム2——加藤典洋氏『敗戦後論』を批判する」、同『戦後責任論』（講談社、2005年、原本は1999年刊）所収。個々の論点について言及するのは本稿の課題ではないが、ナショナリズムに対する高橋氏の基本的な姿勢に、本稿の筆者は疑問がある。高橋氏は、加藤氏の議論に、「自由主義史観や『新しい歴史教科書をつくる会』に見られるような修正主義的、排外主義的ナショナリズムではないとしても、やはり間違いなく新しいナショナリズムの一指標といわざるをえないような諸要素の存在が確認できた」と語り、「ナショナリズムがあらゆる場合に否定されるべきだなどと私は思いません」と断りつつも、「ナショナリズムはナショナリズムであるかぎり、ネーション（民族、国民）の一体性、同質性、同一性を仮構し、異質な他者の排除に向かう本質的傾向をもっていることも否定できない」のであるから、「来たるべき民主主義として、ナショナリズムを超えた民主主義、ナショナリズムなき民主主義を構想すべきだ」と主張する。高橋哲哉、前掲書、175-177頁。これもひとつの立場であることは承認したい。しかし、高橋氏の議論は、結局のところ、ナショナリズム的要素とみなされるものをすべて否定的にとらえ、逆に民主主義を理想化し、それを「異質な民族性や民族的記憶をもつ人々が相互の差異を尊重しあう政治的装置として」、いわば「純化」することで問題の解決をはかろうとする立場

にみえる。たしかにナショナリズムの擁護には危険が伴うが、だからといって、その種の議論をすべて否定的にとらえるのは単純にすぎよう。それは、種々の不正義が、しばしば民主主義の名のもとに引き起こされているからといって、民主主義を擁護するのをやめるわけにはいかないのと同じことである。高橋氏の立場は、民主主義を敵視し、ナショナリズムをやみくもに擁護したがる国家主義者・排外主義者の立場を反転させただけなのではあるまいか。そもそも、ナショナリズムであろうと民主主義であろうと、それ自体は理念にすぎず、それにどういう内実を与えるかは、われわれ自身が決定することである。また、社会の諸制度は矛盾に満ちているのが普通であり、矛盾の存在それ自体は少しも問題ではない。大切なのは、その矛盾が爆発しないように調整することであり、その工夫をするのが社会の知恵というものであろう。われわれがなすべきなのは、対立するものの一方を捨て去ったり、矛盾を抱えたものを純化しようとするのではなく、両者の関係性を考え直すことでなければならない。氏が「抵抗のナショナリズム」を例示しているように、ナショナリズムにも多様な要素があるし、民主主義といえども美しい要素ばかりではあるまい。それに、現実のしがらみのなかで生きている庶民が、自らの生きがいとしてのアイデンティティを模索しようとするとき、国民国家の枠組みを前提に、ある種のナショナリズムを擁護するのは自然なことであろう。民主主義という、美しくはあるけれども具体的な内容のはっきりしない理念のみに依拠する議論が、生きがいとしてのアイデンティティを求めている庶民の心に響くなどとは、とうてい信じがたい。蛇足ながら、排外主義的傾向が世界的に強まりつつある現在であるからこそ、民主主義とナショナリズムをともに語ることがむしろ不可欠なのであり、ある種のナショナリズムを擁護する人びとを、すべて「敵」の側に追いやるような議論は有益とはいえない。なお、ナショナリズムに対する本稿の筆者の基本

的な立場については、間接的な形においてはであるが、以前に明らかにしている。拙稿「民族の魂・民族の再生——ロシア民族主義に関する覚書——」（『山形大学史学論集』第12号、1992年）、同「書評 大木昭男『現代ロシアの文学と社会——『停滞の時代』からソ連崩壊前後まで——』（同、第15号、1995年）。

- 4) 佐藤、前掲書、23-27頁。もちろん、これによって歴史叙述の価値が直ちに失われるわけではない。歴史学にとって重要なのは、このことを常に自覚し、検証を怠らない態度であろう。なお、この問題については、本節の註11)を参照。
- 5) 佐藤、前掲書、110頁。ちなみに、著者によると「5・3憲法記念日」も同じ時期に新聞紙面から消えていく。憲法記念日の祝賀の消滅は、GHQという有力なスポンサーを失ったからである。国家の基本をなす憲法の記念日が、それによって自らの権力を保証されているはずの政府によって冷たく黙殺されるという、現在にいたるまで継続しているこの歪んだ現実には、戦後日本社会の矛盾の集中的な表現があるといってもさしつかえないであろう。
- 6) 佐藤、前掲書、116-118頁。
- 7) 同書、174頁。
- 8) 同書、223頁。
- 9) 同書、251-252頁。
- 10) 同書、125頁。また同書の67頁で、佐藤氏は「おそらく、戦後に生まれた私たちに必要なのは、創作写真を抱きしめることではない。記録写真を持つことができない敗者だったという事実を耐えることではあるまいか。本書全体は、敗戦の事実をメディアの検証を通じて戦後史の中に位置づける作業である」とのべている。つまり、佐藤氏は、戦争を体験していない世代こそ、日本が敗者であったことを自覚せねばならないと主張しているのである。
- 11) 最近では、冷戦の研究者であるギャディスが、ある出来事の直接の体験者の理解と、歴史家によるその出来事の叙述との間の緊張関係について、自らの体験をもとにわかりやすく解説してくれている。かれによ

ると、存命中の人びとは、自分に関するかれの叙述に不満を感じて、次のような質問をするのである。「それが本当はどうであったのか、あなたは どうやって知ることができるのですか。けっきょく私はそこにいたのです。そしてあなたは そのときまだ5歳だったと思いますよ」。ジョン・L・ギャディス／浜林正夫・柴田知薫子訳『歴史の風景——歴史家はどのように過去を描くのか——』（大月書店、2004年）172頁。これに対してギャディスは、「歴史家の側のどんな熟練をもってしても、実際にそこで生きぬいた人にとってみれば（歴史家の描く事実は——引用者。以下、同じ）きわめて奇妙なものと思われるであろう。しかしそれでも、時間がたつにつれて、私たち（歴史家）の描写は、彼らがそのなかで生きていた出来事の直接的な記憶と競合し、そのなかに入り込み、ついにはそれに完全に取って代わるという意味で、事実になるのである。」（傍点原文）と答え、それはたしかに過去を「訴えることもできない牢獄に閉じ込めるのである」が、しかし「過去を抑圧する歴史家は同時に過去を解放し」、「過去を読みやすくし、それゆえに過去を再生することによって過去を保存するのであり」、「（歴史家は）ほとんどブルースト的な意味で、別の時代から残されたものに息を吹き込み、それによって一種の永遠性をそれに保証する」のである、と解説している。ギャディス、前掲訳書、172-179頁。これは一般論としては適切な解説であるが、そこに具体的にどのような内容を盛るか、それぞれの歴史家の問題意識に委ねられている。それでも、次の原則だけは、歴史を語る際の共通の理解とすべきであろう。「歴史は記憶から養分を吸い取る一方で、それを養っていくのだが、記憶が過去を蘇らせようとするのは、現在と未来に奉仕するためである。集合的記憶が、人類の隷属ではなく、その解放に奉仕するように我々は努めなければならない」。J・ル・ゴフ／立川孝一訳『歴史と記憶』（法政大学出版局、1999年）160頁。

12) 増田、前掲書、12-13頁。

II. 敗戦前後の日本国民

ここでは、敗戦前後に、人びとがどのような日常生活をおくり、またどのようなことを考えていたのかということ、当時の日記や回想から明らかにしてみたい。既存の秩序が崩壊した敗戦という特殊な状況下では、日々の生活に根ざした国民の意識の変化がまず先行し、政治やメディアはそれに追随するかたちで変化するという一面があり、このことが戦後日本社会の方向性を決定するうえでも大きな意味を持ったのではないかと考えるからである。もとよりこのような研究は、性別、年齢、職業、社会的地位、思想信条など、あらゆる点で異なったたくさんの人びとの証言を取りあげることが必要であるが、当時の社会や世相に限っていえば、これまでに多くものが語られてきておおむねよく知られていることでもあり、ここでは、本稿の課題にとってとくに重要であると思われるいくつかの記録を対象を絞りこんで検討してみたい。そうすることで、敗戦前後の日本人のある種の心情を、より鮮明に描き出すことができよう。

さて、戦争末期の世相を描くのは本稿の目的ではないが、それでも、当時の社会状況をよく理解しておくことが考察の前提となる。山田誠也のちの作家山田風太郎の日記¹¹⁾には、当時の日常生活に関する興味深い事実がほとんど毎日のように書かれている。ここでは、現代の目から見ればきわめて異常な、しかし当時としてはごく当たり前であった風景を、以下の議論の前提としてあげておこう。（以下、引用文中の括弧書きは、曜日の記載以外はすべて引用者による補足である。また、引用文あるいはその補足として記す場合、原文にな

らい、年号はすべて元号表記、数字は漢数字とする。)

昭和十九年二月：「二十七日…(略)…ライスカレーを作ろうと思ったが、肉や野菜のないことは承知のライスカレーでも、そのカレー粉もコショウもない。二月六日改正された物品税の税率改正で、また食料品の或るものは税務署から販売中止を命じられており、この中にカレー粉やコショウが入ってるとかでどうしようもない。土鍋を二つ買って来たが、1ヶ1円70銭。このフタを売ってない。いまの鍋は全部フタがないとかで、フタのこわれることはまあないのだから、前の鍋のフタを使えという。茶碗もない。あってもカケラの三分の二以上を持って来なければ売ってくれない。²⁾

同年二月：「二十九日 病人用としての半俵以外、今冬ついに炭の配給なし。ほんとうはこの冬三俵配給になるはずが、はじめの二俵は町会事務所の手ぬかりでもらえず、一月分のは二月が終わろうとするのにまだ配給にならない。…(略)…光明は今や国民にとって夢幻のごときものになりつつある。作戦上の機密など分かるべくもないから、いまは『必勝の信念』『皇軍に対する信頼』以外は、ただ『忍耐』よりほかに持つべきものがない。都民はいま一人一人平均一時間は何かの行列に並びはしないか？家庭の主婦は二時間くらい配給の行列に時間をつぶされる。…(略)…先日新宿のデパートにいったら、四階の食堂に、その入口から階段、三階を横断してまた階段、二階を横断してまた階段、はては一階の入口まではみ出していた。これで三時間くらいかかる。それでやっとありつくのは、菜っ葉にカレーをかけたしろものなのである。この行列は消滅しない。空腹のせいである。³⁾

ひどい物不足のために、何を買うにも長い行列をつくらねばならず、これがむしろ日常であった。そこで、こんどは家庭の主婦の証言をみてみよう。家計を預かる主婦の日記ともなると、配給品の不足・欠配に対するばや

きと、たまにおこなわれる配給に対する感謝の言葉が語られない日はないといってよい。

昭和十九年：「七月二十九日 土曜日 晴小雨 今月はまだお砂糖の配給もない お米も不足でこの頃はパンを買ふ人が多く昨日も一時間ばかり行列をし今日も暫らく立ったが丁度平井さんに早く買って貰ふ事が出来た⁴⁾

同年：「九月二十一日 木曜日 晴 煙草もいよいよ買ふのに困難となり七時開店と言ふのに五時過ぎから列を作ると言ふ始末でとうとう主人も断念して貰へた これで朝の大切な時間を浪費する事がなくなって本当に有難いと思ふ⁵⁾

同年：「十月十四日 土曜日 晴 今日には練炭の配給があつて嬉しかったが木炭 薪も早くほしいものである 瓦斯も毎朝一時間だけ配給になる筈なのに当てにならないのには全く困る 然しこれも戦争のための必要方面へ使はれる事だから辛抱せねばならない⁶⁾

これが真冬ともなると、寒気に空襲の恐怖も加わり、状況はもっとひどいものになる。少し長い、雪の東京を襲った有名な空襲の様子を、再び山田風太郎の日記によって再現してみよう。

昭和二十年二月：「二十五日(日) 雪 朝七時半空襲警報。敵機動部隊近接、艦載機群来襲。粉雪霏々としてふる。空に爆音満てど、敵味方わからず。十時ごろ、耳近くたばしる機銃掃射の音にびっくり仰天して机の下にもぐりこむ。午後マリアナのB29呼応して大挙殺到。雪雲暗き東京のはるか上空より無差別盲爆、投弾の爆裂音しきりなり。雪ふる壕にひそむこと数時間、壕中の土、霜柱に板のごとくめくれては崩れおち、惨澹たり。つらら下り、霜柱立ち、粉雪舞いこみ、あたかも氷獄中にあるがごとし。しかもB29西より東へ、盲爆しつつ来り去ること幾編隊なるかを知らず。一編隊去りて一編隊来らざる間、野菜の配給あり。この五日間、野菜の配給まったくなくなりしゆえ、女たち、B29もあら

ばこそ家々を走り出ず。配給いくばくぞ、一人大根の輪切り二寸ずつ、その値三銭なりと。⁷⁾」

また、山田の日記には、通常の史料ではあまり触れられることのない「身辺雑事」が書きとめられていて興味深い。たとえば、裁判官夫人の坂本たね氏は、昭和十九年一月十七日に、「汲取屋がやっと来て臭れて気が軽くなった」と上品に書いている。山田は、ちょうど1年後の日付で、同じことをきわめて「写実的に」書き記す。

昭和二十年一月：「十七日（水）晴 肥運搬人來らず、家多く糞壺より溢る。わが宅にても溢れて汲出口より堀に至るまで、尿と糞ながれて湿潤す。もちろん汚なし。田舎ならばこちらにて如何ともするを得べけれども、東京に於ては手のつけようなし。穴を掘らんか、三坪の庭、その庭せまきまですでに防空壕を掘りてあるを如何せん。⁸⁾」

日常生活においては、平時でもわずらわしいことがたくさんあるものだが、戦時ともなると、それはしだいに耐えがたいものになってくる。人心もまた、すすんでこようというものである。防空壕掘りや空襲による退避で多くの人が毎日泥まみれになるうえに、燃料不足で自宅では風呂に入れないし暖房もないということで、唯一の楽しみとして、銭湯は殺人的な混雑だった。しかし、石鹸もほとんどなく、掃除も行き届かず、利用者のみが殺到するため、当時の「浮世風呂」は想像を絶する状況だった。山田は、銭湯が耐え難いほどに混雑し、ひどく不潔で、おまけに「板の間稼ぎ」が横行している様子を詳細に伝える。そのごく一部を引用しよう。

昭和二十年一月：「七日（日）晴 …(略)…

去年大阪帝大の医学部で検査してみたら、夜七時以後の銭湯の細菌数、不純物は、道頓堀のどぶに匹敵したそうである。世相は物価の急騰に比例して悪化しているから、ことしの風呂などは道頓堀はおろか、下水道くらいになっているかも知れない。さて、まず下駄箱というものがぶきみなものになった。とにかくふつうの履物をはいてゆけば、絶対に盗まれるのである。以前に古清水さんが、男と女と片かたの下駄をはいていて、これなら大丈夫だろうと安心していたら、豈はからんやみごとに持ってゆかれてしまって、残りの両方とも役に立たなくなったという悲劇さえある。高須さんもこれをやられて、さんざん奥さんにその迂闊を叱られた。ところがその翌晩には奥さんがはだして帰ってくるという始末になった。自分などは、片方は歯の抜けて全然ないやつ、他の片方はかかとの部分が三分の一欠けている奴をひきずってゆくのだが、これにはドロ欲がそそられないと見えて、さすがに盗む奴がない。風呂代は十二銭である。昭和十七年の夏上京したときは七銭であった。⁹⁾」

さらに続けて、山田は、銭湯で話される話題について、昭和17年には戦争の話、18年には工場と食物の話、19年は闇の話と末期には空襲の話が中心であったが、20年春には、次のような状況であるという。

「今ではいくら前の晩に猛烈な空襲があっても、こそとも言わない。黙って、ぐったりとみな天井を見ている。疲れ切った顔である。それで、べつに恐怖とか厭戦とかの表情でもない。戦う、戦う、戦いぬくということは、この国に生まれた人間の宿命のごとくである。…(略)…壁の向うの女湯では、前にはべちゃくちゃと笑う声、叫ぶ声、子供の泣く声など、その騒々しいこと六月の田園の夜の蛙のごとくであったものだが、今はひっそりと死のごとくである。女たちも疲れているのである。いや女こそ、最も疲労困憊し切っているのである。¹⁰⁾」

戦争はすでに15年目に入っており、逼迫する生活と、夜ごとに、しかも断続的に襲ってくる空襲の恐怖と睡眠不足で、すっかり疲れきってしまったという話は、多くの日記に書かれている。東京はいまや、まぎれもない戦場であった。いうまでもなくそれは、人びとに極限までの苦痛と緊張を強いた。この非人間的な苦しい体験が、たとえ敗戦という本意なかたちであったにしても、ともかく平和が訪れたと感じたときの日本人の行動に大きな影響を与えたとしても、少しも不思議ではない。しかも上でのべた状況は、3月10日および5月24日の大空襲を受ける前の東京の状況である。この2度の空襲で東京は壊滅し、それ以後は地方都市が無差別爆撃の標的となり、その結果、東京でみられた状況が日本の多くの都市でありふれた光景となる。

地方の主要都市が爆撃にさらされて焼け野原になるころには、敗北という結末を、すでに多くの人びとが予感していたと思われる。たとえば、飛行機材料調達に携わっていた人は、生産がままならなくなった5月には敗戦を予感していたという¹¹⁾。あるいは、宇都宮の一市民は、7月12日の空襲で罹災し、このときから「私の気持ちの上では終戦への流れがスタートしていました。ですから、玉音放送にもショックはありませんでした」、当時は「生きても死んでも、もう成り行き任せのような考えだったと思います」と語っている¹²⁾。また、都市を遠く離れた農村でも、1943年(昭和18年)ごろには、注意深くさえあれば、戦争の行く末を見通すことは可能だったと思われる¹³⁾。ただ、憲兵の目がきびしく、それを口に出すことなどできなかつたし¹⁴⁾、多くの人びとは敗戦ということを考えてがらな

かったようである。それでも、国土と人心の荒廃が進むにつれて、敗戦の事実を受け入れる心の準備が、日本の国民の間で少しずつ醸成されていったことはまちがいない。3月の東京大空襲後の状況を述べたロバール・ギランの言葉に、敗戦後の日本人の行動を予見させるものがあった。

「敗戦は(硫黄島のような)そんな遠方にあるのではなく、いまやここにも存在する。(罹災者たちは)自分の肉親を探し、それと見分けのつかぬ遺品をかき集め廃墟を掘返した。焼跡の残骸の中から半ばよじれた鍋、なん本かの庖丁、こわれた茶碗をかき集めようと、これらの人びとは何日も終日働きつづけ、野天で眠り、破裂した水道を求めて遠くの方まで水を汲みに行き、格好の隠れ場所になる穴の中で眠った。すっかり諦め切ったあげく、彼らは幸福そうにすら見えたのである。彼らにとって悪夢は過ぎ去ったのだ。彼らはすでに敗北を味わってしまったのであり生きながらえたのだから、今後なにが起ころうと平気だという心境に達していた。¹⁵⁾

ギランの伝える「すっかり諦め切ったあげく」「幸福そうにすら見えた」人びとの姿は、「生きても死んでも、もう成り行き任せのような考えだった」という宇都宮の一市民の意識とも重なりあう。空襲という「銃後の戦場」のなかで、日本人の多くが、しだいにこれまでとは異なった目で、自らの世界を眺めるようになってきていたのである。この国民の追い詰められた精神に、さらに大きな打撃を与えたのが、広島に落とされた「新型爆弾」の脅威的な破壊力の情報であり、それに続くソ連参戦の報であった。前者については、原子爆弾であることは秘匿されていたが、軍や報道関係者から早い段階でその噂が流れており、その情報を入手しえた人びとは、一様に敗戦

を悟らざるをえなかった。たとえば、次の日記は、正確な情報と一切の感傷を排した冷徹な記述に、ある種の凄みさえ感じさせる。

「八月九日 木 …(略)…午前片岡君来り、廣瀨空襲の情報を書き。使用せる爆弾は唯1個にして廣瀨市を殆ど全滅せしめたる由。恐らく原子爆弾なるべく是にて戦争の勝敗は決したり。¹⁶⁾」

いわゆる「玉音放送」の聴取とその後の行動も、おそらくはこれら一連の心情の延長線上にある¹⁷⁾。これ以前には、多くの人びとが異口同音に本土決戦を覚悟していると語っており、口先だけではなく、そのような状況になれば、大半の日本人が実際に命を捨てる行動に出たことは確実である。なぜなら、それは、サイパンでも、沖縄でも、すでに立証済みなことだったからである。また、多くの人びとが、敗戦は避けられないとしても、降伏するのは本土で一戦交えてからのことだという認識だったようである¹⁸⁾。したがって、突然と思われた降伏の決定はもちろん衝撃であり、その事実を受け入れるまでに葛藤があったことはまちがいない。しかし一方で、すでに多くの人びとが心のなかでは敗北を覚悟しており、ただそれを確認させる手続きを求めていただけだったというのもまた真実だったのであろう。人間性を失わせる抑圧的な日常のなかで培われたこの複雑な心情と、「玉音を拝する」という空前の経験、さらに天皇の赤子^{せきし}という徹底した皇民化教育の成果が合致したことが、「玉音放送」で戦争が終わってしまったかのような認識を多くの国民に抱かせたのであろう。

次に、8月15日をどのように迎えたのか、ということのみてみよう。あれほど饒舌に日

記に心情を吐露していた山田が、肝心のこの日については、次のひとことを記すのみであった。

「十五日(水) 炎天 帝国ツイニ敵二屈ス。¹⁹⁾」

降伏が近いことを見抜いていた山田であったが、それでもあくまでも戦い抜くという決意を固めていたかれにとって、敗戦という事実が耐えがたい衝撃であったことが、この叙述からうかがえる。事実、次の16日のところで、かれは堰を切ったように思いのたけを吐露することになる。

当時15歳で、高等女学校3年生であった芹沢茂登子氏の日記も、全体の調子は山田と異なるところはない。

「正午重大放送、感激の中に玉音を拝す。ポツダム宣言受諾、こゝに何と言ふ事も知らず、信じられない。たゞ本当とわかった時は『死』の直前のやうな気がした。前途がまっくらだ。泣いた泣いた。泣き通して疲れて床に入っている。筆を取るのも嫌、後日落着いてから思出して書く事。²⁰⁾」

この涙について、芹沢氏は、当時はもっとながらば必ず勝てると思っていたので、「『天皇陛下に申し訳ない』『やはり私達の努力が足りなかったのだ。私達には死あるのみだ』と思うと、あとからあとから涙が流れるのだった」と述懐している²¹⁾。もっとも、報道関係者や一部の軍人は、降伏の決定が8月10日に下されたことを知っていたし、かれらには15日の放送の内容も知られていた²²⁾。しかし、すでに述べたように、そのようなつてがなくとも、生活の実感から敗北は避けられないと感じていた人は多かったであろう。軍隊の対

応についていえば、19日まで夜間の特攻訓練を続行していた部隊や、敗戦を受け入れず命令なしで特攻に飛び立っていった兵士たちがいた²³⁾ かと思えば、「軍の命令がないから」との理由で15日の午後1時に入隊させられ、「短剣も、銃も持たず、丸腰で、ただ書類を燃やし続け」て19日には家に帰っていた兵士の事例²⁴⁾、あるいは議論するばかりで何の方針も打ち出しえなかった部隊²⁵⁾、そして大部分の兵士が無断で帰郷してしまった部隊²⁶⁾にいたるまで、その対応はまちまちですでに統制を失いつつあったが、それでも大きな混乱をひき起こすことはなかった。

問題はむしろ、軍人・兵士や役人に対する見方の変化である。これにもいろいろな証言がある。衝撃的なのは、放送直後に、生き残った特攻隊員に罵声が浴びせられたという回想である²⁷⁾。これほどではなくても、「玉音放送」以後、軍人に対する対応が大きく変わったという話は多い²⁸⁾。また、時の経過とともに、一般の兵士に対する見方も変わっていったことがわかる。

昭和二十一年一月：「十七日…（略）…（東京駅の一角に）復員らしい三人の日本兵が、大きな背囊はいのうを置いたまま、ぼんやり虚ろな眼をあたりに投げていた。『復員っていうと、何か悪漢みたいな気がして来たから、時勢の流れって、面白いわネ』 傍らをけばけばしい二人の少女が話ながら通り過ぎてゆく。²⁹⁾」

また、一部の軍人や役人が、備品や支給品を勝手に山分けしているという話はよく知られていて反発をかっていたが、想像を絶する厳しい食糧難の時期に、横流しされた軍需食料等の恩恵をこうむった庶民もまた大勢いたはずである³⁰⁾。しかしいづれにせよ、軍人や、

これまで権力の末端を担っているとみなされていた人たちは、自らの権威の崩壊を実感しなければならなかったろう³¹⁾。なかでも、東京医専の配属将校が、敗戦後、附属病院の事務員に「転身」したという話は象徴的である。鬼と呼ばれたが、山田にいわせれば、「終戦時に見苦しい醜態を見せる」こともなかった、模範的将校であったという。

「おそらく当分の間は、軽薄な学生のザマ見やがれ的な嘲笑的とならねばならぬ。八月十五日を境としてこんな——もっとひどい運命の逆転を見た人々が多からう。³²⁾」

8月いっぱいみられるのは、このような既存の秩序の崩壊であるが、それにしても、当時の日本が、決して無秩序に陥ることがなかったという点には、注目しておいてよい。しかし、戦後に顕在化する問題は、まさにこの点に根ざしていた。これについては、ギランの卓越した筆が伝えてくれている。

「日本人の性格は、悲劇の幕が閉じた際にもわれわれに最後の驚きを与えた。七千五百万の日本人は、最後の一人まで死ぬはずだった。一介の職人に到るまで、日本人たちは自分たちは降伏するくらいなら切腹をすと言ひ、疑いもなくその言葉を自ら信じていた。ところが、涙を流すためにその顔を隠した日本が再びわれわれにその面おもてを示したとき、日本は落着いて敗戦を迎えたのである。彼らが敗戦を受け容れた態度には意表をつく容易さがあったように思われた。日本人は明かな葛藤を示すことなくページをめくり、久しい間見ることがなかった輝きを顔に浮べさえたのである。あの日本人の微笑だ。³³⁾」

だが、いよいよ占領が間近になると、占領軍、実質的にはアメリカ軍に対する流言

が飛び交ってくる。「男はみな奴隷にされる。女は逃げなければいけない」というのはごくありきたりのもので、材木座あたりの話として大佛次郎が伝えるところによると、米軍が小さい子どもを軍用犬の餌にするというので母親たちが恐怖しているという噂まであったらしい³⁴⁾。この話は、外国の軍隊による占領という未曾有の事態をむかえる当時の人びとの不安な心情をうかがわせるものとして興味深い。この話に付記した大佛の注釈にも注目しておきたい。かれは、次のようにいっている。

「敵占領軍の残虐性については軍人から出ている話が多い。自分らが支那でやって来たことを思い周章しているわけである。日本がこれで亡びないのが不思議である。³⁵⁾」

祖国が降伏し占領されるという初めての経験に、日本人は、自らの行動基準を適用し、たぶんに妄想を交えたイメージをつくりだして恐怖していたわけである。のみならず、軍が、自らの地位を守るためにこの種の流言を流すということもあったようで、名古屋では、流言を根拠に軍への支持を強要したピラをまいたという。神奈川県でも、横須賀鎮守府司令官は、8月20日付で「三浦半島在住の各位に告ぐ」という声明をピラとして配布し、事態の沈静化に努めなければならなかった³⁶⁾。

しかし、実際に連合軍が進駐すると、全体としては、恐れられていたような混乱はほとんどなかった。重要なことは、日本人の心情を大きく変えたのが、米兵との直接の接触であったという事実である。長年にわたって人間性を抑圧され、空襲で痛めつけられた貧弱で惨めな自らと対照的に、実際に接触したア

メリカ兵が、見事な体格をしたおおらかで率直な兵士たちであることが明らかになると、かれらを受け入れる雰囲気は急速に広がっていく。このことも、多くの人が語っている³⁷⁾。皮肉なことだが、占領軍についてはなほだ貧困なイメージしか持ちえていなかったことが、かえって、実際のアメリカ兵の印象をいっそう好ましいものにしたのであろう。こうして、政治の次元では厳しいやり取りがあったにしても、少なくとも現場では「良好な関係」が築かれていたので、占領軍との間で深刻な軋轢はほとんど生まれなかった。そしてそれは、結果的には、占領という不愉快で苛酷な現実を、国民の日常生活の次元で相対化し、希薄化するものとなったであろうし³⁸⁾、連合軍の占領下で、日本人自身が、あたかもその意志で自由を獲得し享受しているかのように、現実を合理化して考えることを許したといえよう。そしてこれこそ、山田がもっとも怖れていたことであった。かれは、8月16日に、「敵が日本に対し苛烈な政策をとることをむしろ歓迎する。敵が寛大に日本を遇し、平和的に腐敗させかかって来る政策を何よりも怖れる」と語っていたからである³⁹⁾。しかし、占領軍の進駐後、上述のような庶民の動向に、メディアや役所も加わり、占領軍統治下での国家再建が急速に推し進められていく⁴⁰⁾。

ちなみに、本稿で参照した日記のうち、9月2日の降伏文書の調印に関連して、いささかなりとも詳細に事実関係を記したり、心情を表明したりしているものはほとんどない。かれらにとって、戦争はすでに8月15日に終わっており、かれらの関心はもはや戦争にはなかった。庶民は、占領軍のもとですでに新

しい生活を営んでおり、9月2日の降伏文書調印は、このような庶民の暮らしを変更するものではまったくなかった。これらの事情から、9月2日の出来事に人びとが関心を払わなかったのは、ある意味では自然なことであつたし、わざわざ屈辱的かつ不愉快な出来事に関心を持ち続ける必然性もなかったと考えるべきであろう。

そんななかであつて、9月2日の降伏文書調印を日本の将来に結びつけて、その心情を書き綴った例外的な人物が、山田風太郎であつた。かれは、8月31日に、日本はドイツほど叩きのめされてはいないけれども、「しかし、はじまるならばこれからである。あさつての東京湾に於ける降伏調印がその序幕となるのである」とのべ、当日の9月2日には、ラジオに耳を傾ける飯田の人びとの風景をやや詳しく書いたあと、ふたたび「すべてはこれから始まるのである」(傍点原文)と記していた⁴¹⁾。そのような山田にとって、いかにやむをえない理由はあるにせよ、占領下での大方の国民の生き方は、ごまかし以外のなものでもなかった。そのことを鋭く自覚していたかれは、それから5ヵ月後の1946年(昭和21年)2月4日に次のように書く。

「とにかく世間がどう騒いで廻ろうと、俺は、はっきりという。日本は決して『自由』も『平和』も獲得していない。客観的情勢は冷酷に、日本のゆくてに寒ざむとした墓場を示している。このことを、日本人が明確に、徹底的に知った時でなければ、日本は再起できないであろう。自由と平和は、自分で掴むべきものであつて、決して与えられて享樂できるしろものではないのだ⁴²⁾。」

註

- 1) いうまでもなく、これらの史料、とくに日記には、それを記録した人びとの個性や生活ぶりがにじみ出る。みなそれぞれに価値があり、比較することなどできないが、そのなかでも、山田風太郎の日記はきわだつて興味深い。1944-45年当時、山田は東京医学専門学校(現東京医科大学)の学生でまだ22-23歳であつたが、学友たちからも一目置かれていた驚嘆すべき読書量とそれに裏打ちされた思考力、叙述の多彩さと情報量の豊富さ、横溢する批判精神と冴えわたる諧謔など、とても20代前半とは思えない成熟ぶりをみせて圧倒的な存在感がある。現在のところ刊行されている山田の日記には、以下のものがある。山田風太郎『戦中派虫けら日記——滅失への青春——』(筑摩書房、1998年。以下、山田『虫けら日記』と略記)、『新装版 戦中派不戦日記』(講談社、2002年。以下、山田『不戦日記』と略記)、『戦中派焼け跡日記 昭和21年』(小学館、2002年。以下、山田『焼け跡日記』と略記)、『戦中派闇市日記 昭和22年 昭和23年』(小学館、2003年)、『戦中派動乱日記 昭和24年 昭和25年』(小学館、2004年)。
- 2) 山田『虫けら日記』301頁。ちなみに、昭和19年4月に山田が引越した新宿の貸間は、「二階八帖、床の間つきで日当たりよし。一ト月十六円、他に電気代一元」であつた。さらにいえば、雑炊食堂の「雑炊は一食分二十五銭か三十銭」であつた。同書、336-337頁。
- 3) 山田『虫けら日記』302-304頁。
- 4) 小寺幸生編『戦時の日常——ある裁判官夫人の日記——』(博文館新社、2005年)203-204頁。
- 5) 同書、207-208頁。山田は、煙草が配給制になる直前の昭和19年10月27日の日記に、煙草を求める人びとの行列は「千メートルは優に続く」と書き、「女房連」がおしゃべりをし、巻煙草を吹かしながら煙草を買うために並んでいる光景を、「いかにも戦争八年目の巷らし」と評している。山田『虫けら日記』485頁。さらに、吉村、

- 前掲書、51-55頁も参照。
- 6) 同書、209頁。残念ながら、この日を最後に主婦の日記は中断してしまう。同年11月からは空襲も始まり、おそらく日記をつけるどころではなくなったのであろう。再び日記をつける心の余裕が生まれてくるのは、1946年（昭和21年）11月のことである。
- 7) 山田『不戦日記』88-89頁。このころになると、B29は、レーダーを用いて、低く垂れこめた雪雲の上からでも投弾できるようになっていた。山田が書いているように、この日の空襲も、降りしきる雪をつけておこなわれた。雪の日曜日ということで印象深かったのであろう、フランス人ロベール・ギランも、美しい雪化粧の東京を一変させたこの日の空襲について記録している。ロベール・ギラン／根本長兵衛、天野恒雄訳『日本人と戦争』（朝日新聞社、1979年）266-267頁。ちなみに、1945年の2月は、40年ぶりの大雪になるなど、もともと記録的な寒さであったうえに、暖房用の燃料不足が重なって、耐え難い寒さであったという。空襲も、このころから本格化したのである。ロベール・ギラン、前掲訳書、263頁。高見順『敗戦日記』（文藝春秋新社、1959年）78-80、83、85-92頁。
- 8) 山田『不戦日記』43頁。
- 9) 山田『不戦日記』20頁。なお、山田には、銭湯に関して次のような記載もある。昭和二十年一月「十四日（日）晴 先日あまりに銭湯の悪口を書きたる天罰きめん、きょうメリヤスのシャツ二枚板間に盗まる。最も上等なるシャツにして、あと所持せるはぼろぼろにちかきしろものばかりなれば閉口す。しかし可笑しくもあり」。山田『不戦日記』40頁。また、清水勲『漫画にみる1945年』（吉川弘文館、1995年）40-41頁。
- 10) 山田『不戦日記』23-24頁。
- 11) C R T『戦後50年』90-91頁。またNHK「あの日 昭和20年の記憶」取材班編『終戦60年企画 あの日 昭和20年の記憶』上（NHK出版、2005年。以下、NHK『あの日』と略記）33頁。
- 12) C R T『戦後50年』93頁。
- 13) 小学館『昭和体験』上、96頁。
- 14) 高見、前掲書、279頁。清沢洌／橋川文三編『暗黒日記』3（筑摩書房、2002年）356-357頁。
- 15) ロベール・ギラン、前掲訳書、284頁。清水、前掲書、26-27、74-77頁。当時17歳で専門学校1年生だった歌人の馬場あき子氏も、焼け出されてからは、生活に役立つものを求めて焼跡を掘り返していた。なかでも、焼けた家屋が炭になっていて、その炭が貴重だったという。『焼けはてて残るものなき家のあとに 炭を拾ふと我は立ちたり』。まあ、なんてことない、そのままの歌ですけどね。…(略)…何をやっても駄目で、前途にはもう何にもない。で、負けたときどうなるか分からないけど、死ぬのか生きるのか。…(略)…どうなるんだか、見当つかないんですよ。その日その日がもう生きてるっていうだけの時代ですからね。NHK『あの日』302-303頁。山田『不戦日記』385-386頁。
- 16) 大川周明顕彰会編『大川周明日記 明治36年～昭和24年』（岩崎学術出版社、1986年）390頁。原爆に関する記述には、それぞれの執筆者の関心のありよう個性が強く感じられるし、情報源の違いによるものであろう、情報の正確さにも相違があり、非常に興味深い。徳川夢声『夢声戦争日記』第五巻<昭和二十年>（中央公論社、1959年）124-125頁（8月8日の日記）。なお、徳川夢声の日記のうち、昭和20年の4月から8月までの記録に関しては、次の書物でも読むことができる。『夢声戦争日記 抄一 敗戦の記一』（中央公論新社、2001年）。高見、前掲書、251-259頁（8月7日-9日の日記）。森正蔵『あるジャーナリストの敗戦日記 1945～1946』（ゆまに書房、2005年）9-11頁（8月11日の日記）。『大佛次郎 敗戦日記』（草思社、1995年）296-304頁（8月8日-10日の日記）。伊藤整『太平洋戦争日記』（三）（新潮社、1983年）335頁（8月12日の日記）。山田『不戦日記』375-377頁（8月11日の日記）など参照。

- 17) もっとも、「玉音放送」も、よく言われるように、みんながいづまいを正して拝聴したわけでもなさそうである。疎開先の飯田で実見した話として、山田は、天皇の放送を聴きながら、炊事の老婆がいつもと変わらず馬鈴薯を刻みつづけていた話や、放送後も芝居小屋がいつもと変わらずにぎやかだったことを伝えている。山田『不戦日記』424-425頁。「玉音放送」に関する文献は数多いが、ここでは、竹山昭子『玉音放送』(晩聲社、1989年)を、また天皇制との関連でこれを論じたものとして、小森陽一『天皇の玉音放送』(五月書房、2003年)をあげておきたい。
- 18) 高見順は、放送の内容を知らなかった。放送を聞く前のこととして、かれは次のように書いている。「『ここで天皇陛下が、朕とともに死んでくれとおっしゃったら、みんな死ぬわね』と妻が言った。私もその気持だった」。高見、前掲書、280頁。また、伊藤、前掲書、335-336頁。
- 19) 山田『不戦日記』406頁。
- 20) 芹沢茂登子『軍国少女の日記』(カタログハウス、1995年)166頁。
- 21) 同書、166-167頁。同様の回想は多い。C R T『戦後50年』18-19、26-27、44-45、66-69、88-89。「『どうなの？(ソ連に対する)宣戦布告でしよう？どうなの？』と、(大衆食堂の)おばさんがかすれた声でいった。訴えるような瞳であった。…(略)…信じられなかったのである。日本が戦争に負ける、このままで武器を投げるなど、まさに夢にも思わなかったのである。『済んだ』と、僕はいった。『おばさん、日本は負けたんだ』…(略)…『く、口惜しい!』と、一声叫んでおばさんは急にがばと前へうつ伏した。はげしい鳴咽の音が、そのふるえる肩の下から洩れている。みな、死のごとく沈黙している。ほとんど凄惨ともいべき数分間であった」。山田『不戦日記』413-414頁。このような人びとと好対照をなすのが、永井荷風である。永井荷風『摘録 断腸亭日乗』(下)(岩波書店、1991年)274頁。
- 22) 徳川、前掲書、144-152頁。高見、前掲書、264-285頁。『大佛次郎 敗戦日記』304-309頁。森、前掲書、7-21頁。添田知道『空襲下日記』(刀水書房、1984年)222-223、228-229頁。『大川周明日記』390頁。吉村、前掲書、196頁。
- 23) C R T『戦後50年』70-71、94-95頁。その他、山田『不戦日記』441頁なども参照。
- 24) 同書、110-111頁。
- 25) 中野重治『敗戦前日記』(中央公論社、1994年)644-647頁。
- 26) C R T『戦後50年』20-21頁。
- 27) 小学館『昭和体験』下、53-54頁。
- 28) 山田『不戦日記』433頁(8月17日)、459頁(9月1日)。
- 29) 山田『焼け跡日記』33頁。
- 30) 『大佛次郎 敗戦日記』319-320頁。高見、前掲書、299、304頁。山田『不戦日記』456、569頁。
- 31) 「九月一日 在郷軍人会が解散になった。虎の威をかりて「暴力」を振っていたあの分會……」。高見、前掲書、310頁。また山田風太郎は、「戦争中たあちがうぞ」といって土浦の駅員をどやしつけた男が、「ひとりごとのように、『戦争中には駅員なんて奴が大きな面をしゃがったから、これからは少しおどしてやるに限る。何でも逆になったんだから』と、いった。」と伝えている。山田『不戦日記』581-582頁。また、大佛は、軍人のなかには、悄然としている者と、かえって人をへい睨んでいる者と二色あるそうだと、伝えている。『大佛次郎 敗戦日記』311頁。
- 32) 山田『不戦日記』573頁(10月22日の日記)。また、伊藤、前掲書、343-344頁。
- 33) ロベール・ギラン、前掲訳書、390頁。ギランは、「玉音放送」前後の日本人の「豹変」を描写するとともに、長年にわたって日本人を観察してきた記者として、興味深い日本人論を展開している。ロベール・ギラン、前掲訳書、385-403頁。
- 34) 『大佛次郎 敗戦日記』313頁(8月20日の日記)。この噂は、8月23日の日付で、高見も伝えている。「鎌倉のある町内会長は、五歳以下の子供をどこかへかくせ、敵

が上陸してくると軍用犬の餌にするから・
……そう言いふれて歩いたとのこと。なん
というバカバカしい、いや情けない話で
あろう」。高見、前掲書、299頁。なお、
添田、前掲書、231頁、CRT『戦後50年』
31、79頁なども参照。

35) このうわさに対しては、高見も、「自分
を以って他を推すという奴だ。……(略)……
・自らの恥かしい心を暴露しているのだ」と
いっている。高見、前掲書、293頁。

36) 『大佛次郎 敗戦日記』314-315頁。

37) 山田『不戦日記』508-509、559-560、
567、587頁など。もっとも、アメリカ軍
の人気の高さは、ソ連の不人気の裏返しと
いう面もあった。高見、前掲書、315頁。

38) 「九月二日……(略)……横濱に米兵の強
姦事件があったという噂。『負けたんだ。
殺されないだけまだ』『日本兵が支那で
やったことを考えれば……』こういう日
本人の考え方は、ここに書き記しておく
『価値』がある」(傍点原文)。高見、前掲
書、311頁。ここに、当時の日本人の屈折
した心情が現われている。

39) 山田『不戦日記』432頁。

40) 山田は、8月30日に新聞論調が日々
変ってゆくと述べ、9月1日には、「新聞
がそろそろ軍閥を叩きはじめた」と記して
いる。山田『不戦日記』453、457頁。高
見の伝えるところによると、「敗戦」の文
字がはじめて新聞に現れたのは、8月19
日のことである。それまでは「戦争終結」
だったという。高見、前掲書、292頁。

41) 山田『不戦日記』455、460頁。

42) 山田『焼け跡日記』76頁。なお、自由
が与えられたことを率直に喜ぶ高見も、そ
の問題性には気づいていた。

九月三十日：「……(略)……戦に負け、
占領軍が入ってきたので、自由が束縛され
たというのなら分るが、逆に自由を保障さ
れたのである。なんという恥かしいことだ
ろう。自國の政府が自國民の自由を、——
ほとんどあらゆる自由を剥奪して、そ
うして占領軍の通達があるまで、その剥奪
を解こうとしなかったとは、なんという恥

かしいことだろう」。高見、前掲書、331
頁。

そしてこの高見も、それからわずか3日後には、
次のように書いている。

十月三日：「……(略)……東洋経済新報が
没収になった。これでいくらか先日の『恥
かしさ』が帳消しの感あり。アメリカが
我々に與えてくれた『言論の自由』は、ア
メリカに對しては通用しないということ
もわかった」。高見、前掲書、333頁。

むすびにかえて

本稿の目的は、日本人の歴史認識の弱さとい
う、増田氏の指摘の内容と意味を、改めて
考えてみることであった。そのために、ごく
限られた視角からではあったが、敗戦前後の
日本の状況と人びとの心情について、各種の
日記や回想を手がかりにして検討してきた。
ここから、当時の日本人の二つの心情をみて
とることができよう。ひとつは、敗戦直前の、
長期化した戦争と連夜の空襲に疲れきった国
民の心情である。それは、誰によって、どの
ようにしてもたらされたものであろうと、平
和がもたらされるなら、それを何よりも貴重
なものとする人びとの姿であった。いまひ
とつは、敗戦後、アメリカ軍兵士との接触を
とおして、アメリカの占領統治に急速になじ
んでいく日本人の姿であった。そして、この
二つの心情はまもなく一体のものとなり、そ
れが多く日本人の行動様式を決定していく
ことになった。当時の日本人を注意深く観察
していた人びとに、あたかも手のひらを返す
ようにアメリカになびいていく日本人という
印象を強く刻印づけたのは、このような動向
であつたらう。この点をとらえて、日本の

「知識人」たちが、日本人の軽薄さや浅薄さを指摘するのは珍しいことではなかったし、たしかにある種の軽薄さ・浅薄さがあったことも否定できない¹⁾。しかし、単にそれらを指摘するだけでは、歴史的な考察として不十分である。問題は、軽薄さ・浅薄さの内実であり、またそれらが何に由来するのか、ということの追究であろう。増田氏が果たそうとしたのは、まさにこの課題であった。

「知識人」の目に軽薄とみえた庶民も、ただ流されていたわけでは、おそらくなかったし、政治家やメディアはもっと巧妙に立ちまわった。「ずっと日本にいた人間」で冷静な観察者であったフランス人のギランは、「米軍兵士の騒々しいが優しいふるまい」から多くの教訓を学んだ日本人は、「新参者でナイーブな占領者たちは気づかなかつたが」、「外国人のもたらすものを何でも日本化してしまう」という伝統的なやり方で、外部から持ちこまれたいっさいをすっかりデフォルメしてしまったと評価する。追放された者たちも、国会に自分の派閥の人間を送りこみ、やがては自らカムバックすることを期したし、トラストは細分化されたもののすぐに癒着していくという具合である²⁾。日本の占領をこのように評価したギランは、次の言葉で自著を締めくくった。

「詰めこまれたすべてが、いっさいのものを日本の色に染め上げる水槽を通過する。酸が、日本化が可能でないすべてのものを蝕みはじめる一方、胃液がゆっくりと消化できるものすべてを摂取して行ったのだ。こうして日本はこっそり、アメリカの占領を消化してしまったのである³⁾。」

こうして、アメリカの支配を貪欲に飲みこ

んでしまった日本人は、しかし同時に、戦争とその敗北にまつわる多くの不愉快な記憶までも、消化不良のまま飲みこんでしまう結果になった。それを可能にしたのは、ひとつには、戦前の日本人とはまったく異なるアメリカ軍兵士たちの行動様式と対峙戦を念頭においたアメリカの巧妙な占領政策・「民主化」政策であり、いまひとつは、戦前に徹底しておこなわれた皇民化教育の成果としての、批判精神の鈍磨と集団主義的行動様式であったろう。民主化と皇民化の成果とは明らかに矛盾するが、それは高度経済成長の追求という目標へと「昇華」され、しだいに自覚されなくなっていく。ここで、佐藤卓己氏がメディア学の立場から明らかにした事実、つまり、日本人が、戦前と同じ心性の上で、意図的につくりだされた終戦の記憶に依拠して生きてきたという事実を思い起こすことは、むだではなかろう。

敗戦の事実がこのように扱われるのであるから、開戦の事実が問題にもされなくなるのは、しごく当然であった。

昭和二十年九月：「八日…（略）…十二月八日、アメリカに対する日本帝国の怒りは荘厳を極めた。八月十五日以来、日本政府が命がけでマッカーサーに米つきばったのごとお辞儀している姿は、ただ滑稽の一語につきる⁴⁾。」

山田のように、敗戦後の政府の行動を滑稽であると感じずる精神は、本来、12月8日の「怒りの荘厳さ」を問題にすることと一体であり、ひいては戦争そのものについて深く考えることに道を開くものだったはずである。しかし、日々の生活に追われ、米軍支配をさしたる抵抗もなしに受け入れた敗戦後の日本で、この問題が、1941年12月8日あるいは1931

年9月18日等の日付とともに、歴史のなかに位置づけられ議論されることはついになかった。メディアに関して、佐藤氏によれば、「一九四五年八月一五日を境に変化したメディアは、新聞、放送、出版など、どの分野にも存在しない⁵⁾」のである。ここで、増田四郎氏が、日本人の歴史認識の弱さの理由のひとつとして「人口過剰と生活の苦しさ、その不安定、ゆきあたりばったりの考え、国家本位の立身出世主義等」をあげていたことを改めて想起したい。増田氏のいう「ゆきあたりばったりの考え」とほぼ同様の要素を、ギランも日本人社会のなかに見出ししている。

「不条理のただ中で反省することもなく頑張り抜くというのが、一九三〇年代、四〇年代の日本の政策の特徴だった。…(略)…それは、前代未聞の「豹変ぶり」によって、原爆が好戦的な熱狂にとって代わるまで続いたのだ。こうしたことは策謀だったのか、あるいは盲目だったためなのか？いやむしろ軽率さであり、真摯さの欠如だったのだ。七千五百万の日本人が真摯さに欠けていた、というこの基本的な説明なしには、つい先ごろの過去の出来事を完全に説明することはできない⁶⁾。」

真摯さの欠如したところに、ゆきあたりばったりの生活態度や自己欺瞞が横行しがちであるのは、自然の成り行きである。敗戦前後の山田の日記のあとに、高度経済成長の始期と終期に位置する増田氏とギランの著作をおき、さらに社会主義崩壊後間もない時期の加藤氏の著作と、それから10年あまりたって公刊された佐藤氏の著作を並べてみると、立場や主張に異なる点はもちろんあるものの、本質的には、それらがいずれも日本人のもつ歴史認識のある種の欠陥、あるいは自己欺瞞の生き方を指摘するという共通性を持ったも

のであることがわかる。そしてこのことは、この問題が、日本人の間でいまもって未解決のままであることを物語っている。本稿の筆者が、冒頭で、「われわれはいまなお、あの戦争の、『負の遺産』を背負って生きている」と表現したのは、まさにこの意味においてであった。問われているのは、憲法、軍隊、天皇制という、まさしく国家の根幹に関わる問題であるだけでなく、戦後の日本人の生き方そのものなのである。

降伏文書調印からわずか1ヵ月半ほどのちに、山田はすでに次のように書いている。

「われわれは平和の尊むべきことを知っている。復讐という行為に対する動揺や懐疑に理のあることも知っている。しかし、後に至ってふたたび三度豹変する醜態は、今だけでたくさんだ。とはいえ、われわれは魂の分裂のためになおこれから長く苦しむであろう⁷⁾。」

これまでみてきたところから、戦後日本人の歴史認識の背景となったものを、ある程度浮き彫りにできたように思われる。それは、戦前の日本社会の影響と連合軍の占領という条件のもとにおいては、十分な理由のある状況であった。しかし、それから短いとはいえ時間流がすでに流れ、社会状況も大きく変化している。それは、敗戦に端を発している未解決の諸問題を、いま一度取りあげて真摯に検討する条件が整っていることを意味する。佐藤氏も、「日本の終戦記念日はいつか」ということを「客観的に問う知的風土が戦後日本には長らくなかった」と指摘し、そうであれば、「八・一五＝終戦記念日」をめぐる問題は、「むしろ、戦後生まれの私たちが、その戦後体験から検証すべき課題なのではあるまいか」と主張している⁸⁾。また、歴史的なものの考

え方について考察した増田氏は、その結論として、個別的なものへのよろこび（＝自己主張）と、普遍的なものへの透徹（＝自己否定）との「二つが各人の力に応じて、遊離しないで統一的に、漸次はその視野を拡大してゆく時、そこではじめてわれわれは、自分の頭で自分の周囲、ひいては『世界』の意義を真に主体的に知る知的な情熱に燃えることが出来る」と指摘し、このような「真に歴史的な考え方にみずから苦しむ」という「努力をおこたる民族の中には、思想的意味での独立さえも容易に築かれぬのではなかろうか」と警告していた⁹⁾。増田氏の発言は、ここでも、いまなお効力を失っていないように思われるのである。

註

- 1) 高見、前掲書、294-295、306頁。『大佛次郎 敗戦日記』345頁。添田、前掲書、238頁など、この種の記述は枚挙に暇がない。また、8月22日に、情報局の係官が文学報國會に対し、「今後は、たとえばアメリカの御機嫌をとって貰うような作品を書いていただくかもしれません」とはつきりいったという話は、会合の出席者から直接聞いた話として、高見と大佛がともにあい前後して日記に書いている。高見、前掲書、297頁、『大佛次郎 敗戦日記』317頁。もとより、このような官僚の無節操と、庶民の軽薄さを同列に論じるわけにはいかない。庶民の軽薄さには、もっと悲哀が漂う。たとえば、両親を早くになくした山田の後見

人で医者であった山田の叔父は、山田のような気楽な立場ではなかったから、占領軍の支配下で大いに苦勞したことであろう。山田の辛らつな筆からも、アメリカ兵に振り回されるその姿が浮かびあがってくる。

昭和二十一年一月：「七日（月）曇
…（略）…午後また米兵二人、通訳一人、八鹿署長、当村駐在巡査ジープにて来り薬局を検分す。…（略）…ヒロイン三、モルフィン三、押収さる。『合衆国政府の命令に依り、ランディス軍曹押収す』とのメモ残し、サヨナラサヨナラといいて還り行けり。妹、薬局の娘二人窓より顔並べて恐る恐る覗くに、オーキコと愛嬌ふりまく。八月十五日激昂に『八万四千の毛穴より熱血を吹きたる』叔父『またお暇の節はお遊びを——』などいう。滑稽也。山田『焼け跡日記』11-12頁。

- 2) ロベール・ギラン、前掲訳書、406-407頁。
- 3) 同書、408頁。
- 4) 山田『不戦日記』484頁。
- 5) 佐藤、前掲書、257頁。
- 6) ロベール・ギラン、前掲訳書、395頁。
- 7) 山田『不戦日記』565頁。
- 8) 佐藤、前掲書、262頁。
- 9) 増田、前掲書、15、27頁。

【付記】本稿は、山形大学人文学部プロジェクト研究：研究課題「冷戦後（旧）社会主義圏における歴史像形成に関する比較研究」の研究成果の一部である。